

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「明智光秀と龍馬」

総務省・地域情報化アドバイザー
現代龍馬学会副会長
坂本世津夫



坂本龍馬に関連した私の研究テーマは、「明智光秀と龍馬」である。本来私は郷土史や坂本龍馬には詳しくなく、大学では、地域情報学や社会学哲學の研究をおこなっている。その人間が何故「明智光秀と龍馬」か、と言ふと、実は、この「一人」と、我が先祖領石や亀岩の坂本家との間に、何らかの繋がりがあるのでないかと考えているからである。

400
年住み
続けた場所

私の家は南国市領石にあるが、多分400年以上はここに住んでいるのではない。かと考へてゐる。本家は亀岩であり、龍馬の先祖が暮らしていた才谷とも目と鼻の先の距離である（領石・亀岩・才谷は謎のトライアングル）。昨年は、NHK大河ドラマ『龍馬伝』が放送されたし数年前には『功名が辻』が放送されたがそこに描かれている土佐は、本来の土佐とはかなり違うのではないかと考へてゐる。それを調べるのが「私のテーマ」（ラジオワーク）である。

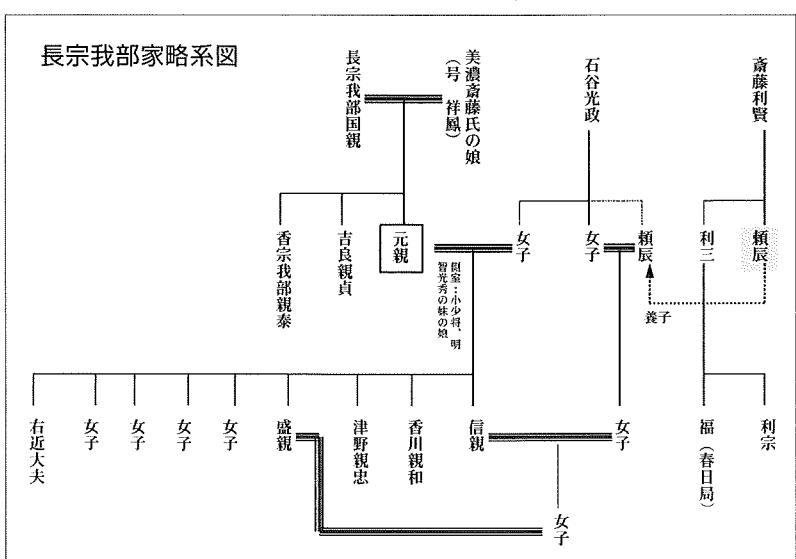
早速、420年前に飛びが、その頃、南国である岡豊城があつた。長宗我部元親は、長宗我部第20代当主・長宗我部国親の長男で、第21代当主である。母は、美濃斎藤氏の娘(号祥鳳)。正室は、石谷頬辰(足利義輝の家臣)の娘で、石谷頬辰、斎藤利三の異父妹である。側室には明智光秀の妹の娘がいる(側室・小少将明智光秀の妹の娘)。長宗我部元親の夫人は、天正11年7月22日(1583年)、本能寺の変の翌年に亡くなっている。亡くなつた原因も、墓所も不明である。夫人の正式な名は不明であるが、司馬遼太

同じ時期、南国市亀岩には坂本城があり、墓石に「坂本家先祖 初代ハ亀岩坂本城々主坂本喜三兵衛天正十年近江坂本城落城後土佐ニ來リ長曾我部元親

坂本家の先祖をたどる

ある辺り)に城を移し、大高坂が水害が多い為、3年後の天正19年(1591年)浦戸城に居城を移すまで、岡豊(南国市北部地域)は土佐の中心地であった。土佐の国は、想像するよりも遙かに中央(岐氏の斎藤や明智など)との関係が強かつたわけで、中央からの多くの武将や商人(近江商人など)が岡豊城の周辺に居住したことが想像される。

秀の娘」の子ともではないと推測している。戦国時代は、政略の為に色々な形態で婚姻をするので、妻や子どもといつても、現代と同様に考へることはでない。本妻がいれば、側室もいる。場合によつては、離婚し、主人(妻)を変えることもあります。太郎五郎は、明智光秀の直接の子孫ではないが、明智一族の子孫ではあることに間違いないと考えている。



記念館だより

『龍馬伝』への悪口

京都国立博物館 宮川 権一

放送中からさまざまの評判の
あつた大河ドラマ『龍馬伝』だが、
「ドラマですか」と放送中は好意
的には見ていた。しかし終了後こ
れくらい時間が経てばその批判を
書いても良いだろう。

細かいことはさておいて、薩長同
盟締結時における龍馬の役割の描
き方に大いに不満があったのだ。
ドラマでは回分がそれにあてら
れると聞いて嫌な予感がしていた。
どうやつてあの「重大な場面」を
やつてくるのだろうかと。放
送では京都の薩摩屋敷で西郷が
同盟交渉を始めようとしたらい
う」と木戸が言い、やがて龍馬が
やつてくる、そして交渉が成立する、
という拍子抜けもきわまつた演出
だった。

歴史的にこんな場面だったのだ
ろうか？あるいは「龍馬が居なく
ても同盟はすでに出来ていた」とい
う近年はやりの学説を読みすぎ
たのだろうか。ドラマなのにまったく
くドラマチックではなかったのだ。

『龍馬伝』は坂本龍馬をかっこよ
く描くドラマとしては企画されて
いたなかつたということなのか？等身
大の龍馬像とはこういう意味なの
か？そもそも龍馬の大活躍などは
後世の作り話なのか？
視聴者は「なんのうしろだとも



(写真)慶応二年頃の幕府軍洋式歩兵
〔近世珍話〕京博蔵より)

ない介の浪士である龍馬が大藩
の面子のために同盟を言い出さ
ない木戸と西郷の間にたつて怒つた
りなだめたりして、苦労の末よう
やく同盟を成し遂げ、もつて明治
維新の方向性は定まつた。だから
龍馬はすごい」というカタルシスを
求めていたはずだ。今までの小説
やドラマではクライマックスとして
描かれてきた番肝心の部分であ
る。それを覆すほどの学説なのだ
ろうか？

歴史が人を動かす名場面が見た
人が歴史を動かすのではなく、
人が歴史を動かす名場面が見た
かったのに…。

ここで言いたいのは学問的に正
しいか否かではない。『龍馬伝』の
原作者・制作者は「本当はあんま
り龍馬のことが好きではないので
はないか」という薄ら寒い思想であ
る。

“話してみるかよ”

夜明けはいつ

渡辺 瑞海

東北関東大地震から半年が経過した。大津波の衝撃、相次ぐ余震に加え「放射能汚染」に直面、復興への道のりは遠い。知り合いの編集者から来たメールには「放射能は、慣れるよ」と書かれていて、これは衝撃だった。実際のところ日々暮らす彼の率直な感想なのだろう。目に見えず臭いもない放射能は透明のベンキに例えられている。風向きによって大地に塗りたくられた透明のベンキ。「直ちに健康に影響はない」という言葉の空虚さは例えようがない。

私たちは原発の崩壊で日本がいかに小さな島国だったかを思い知った。そしてこの国に他に例を見ないほどの多くの原発が密集されている狂気にもやっと気づいた。黒船来襲を目にした龍馬の驚愕、憂国の想いに気持ちが重なる。

龍馬はこんな歌を残している。「人心けふやきのふとかわる世に独なげきのます鏡哉」土佐弁にすればこういう意味だ。“人の心が昨日と今日とで変わらるような世の中を、ひとり嘆きゆうわよ”

「未来の龍馬」が日本を洗濯するのはではなく、今を生きる人の中にある、地の底から湧き上がるような強い精神ではないかと思うことがある。

龍馬は私たちの心の中にいる。私たちは沈痛な想いの中で、手探りで立ち上がりうとする同志と共に伴走しよう。これからは日本を愛い、日本をどう変えてゆけばよいのか暗中模索しながら、夜明けを待たねばならないのだから。



雲もやがて流れゆく

コラム・龍馬のこと

オランダ語の手紙

高知新聞編集委員 片岡 雅文

昭和13年11月26日付の高知新聞に、坂本龍馬にまつわる面白い記事が載っていたらしい。「らしい」というのは、いかにもあやふやな言い方だが、昭和13年のその新聞が戦災で焼けて残っておらず、いまのところ確かめようがないからだ。

ただ幸いにも、当時の『土佐史談』(66号)に記事の一部が転載されていて、概略がわかる。そのなかで注目したいのは、

「高知市升形松村正太郎氏の所蔵のうち坂本龍馬が書いた和蘭語の手紙がある」と、記されていることだろう。

何年か前、『土佐史談』でこの記事を見つけたとき、私はちょっと興奮した。龍馬のオランダ語（和蘭語）の手紙？ もしいまも松村氏の家に残されているなら、ぜひ見せてもらいたいものだ。龍馬に対する見方が変わっていくかもしれない……。

松村正太郎氏は、『高知県人名事典』によれば、土佐電気、四国銀行、高知新聞などの取締役をつとめた実業家で、昭和43年に亡くなっている。しかし、二、三の人に尋ねてもはっきりしたことがわからず、ずっと気になりながらそのままになっていた。

龍馬がオランダ語で書いた手紙は、いったいどこへ行ったのだろう？それがやっと明らかになったのは最近のことだ。私がお世話をしているM先生が、松村氏に仲人をしてもらうほど親しかったという。そこで先生に手紙を出して、松村氏のご子孫に問い合わせてもらえないかとお願いしたのである。先生はすぐに電話をして、聞いてくださったようだ。

M先生からの返事。「升形にあった松村家は昭和20年の空襲で焼けました。土蔵にしまわれていた書画や文書類も（そのなかに龍馬の手紙もあったのでしょうか）、すべて灰になったとのことです」

がっかりとは、まさにこんな場合を言うのだろうと、私は溜息をついた。

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

<http://ryoma-kinenkan.jp>